

照明灯

草花を枕元に置き正直に写生していると、造化の秘密が分かってくるような気がする。正岡子規が随筆「病牀六尺」に書き留めている。真に迫る色形を表現するため工夫を凝らすうち、万物を化育する意匠を感じてくるのだろうか▼子規は「俳諧大要」で「写真的自然は俳句の大部分にして、即ち俳句の生命なり」と説いた。神奈川太字が主催する全国高校生俳句大賞の山口ヨシ子専門委員長は、対象に内在する何物かをありのまま読み取ろうとする子規の精神を、より良き生を探索し続ける心と考えている▼20回目の前年

度は197校から1万2千通近い応募があった。県内校の入選作から幾つか▼弟に／白服着せて／帰る里。横浜翠嵐高2年の野澤みのりさんは両親の古里へのお盆の帰省を詠んだのか。まぶしい陽光の下、仲のいい姉弟の姿が浮かぶ。まつさ／原稿用紙／遠花火。麻生高3年の矢田安侑子さんは夏の思い出をつづろうとしているのかもしれない。しじまを破る花火の音が余韻を誘う▼神大附属高2年岩下遼平さんは句集に銘打たれた「17音の青春2018」を地でゆく。僕だけを／見ていてくれよ／扇風機。ほほ笑ましくも切なく、そして爽やかな刻。17文字に込めた思いを皆、忘れないでほしい。